

本居宣長の四声認識について

上野和昭

一

本居宣長（一七三〇～一八〇二）の四声についての認識は『漢字三音考』（天明五年（一七八五）刊）の「四声の事」において詳しく知ることができる。しかし、そこに記された宣長の認識には一見して矛盾するところがある。宣長は、はじめに日本に伝わる四声と当時の中国のそれとを比較して、それぞれの四声の調値を述べる。日本の四声についての記述は次のようである。

皇国ニテハ。昇ラズ降ラズ平^ラカナル聲ヲ平トシ。昇ル聲ヲ上トシ。降ル聲ヲ去トシテ。其聲各其名ノ如クニシテ。律二叶ヒ。絲竹等ノ物音^{チ、ネ}ノ低昂ニヨク合ヘハナリ。（四〇ウ）

しかるに、これを日本語のアクセントとして具体的に説明する段になると、つぎに引用するように、右の宣長の認識をそのまま適用したのでは、にわかに理解しがたいことになってしまう。

日ハ平声。樋ハ上声。火ハ去声ナルヲ。……山ハ平声ナルヲ。サテ又山ハヤトマトノ二音。川ハカトハトノ二音ニテ。

是ヲ一音ヅ、分テ各四声ヲ云トキハ。ヤハ上声マハ平声。カハ上声ハハ平声也。然レドモ又ヤマトモカハトモ連ナリタル言ノウヘニ平上去アリテ。山モ川モ平声也。……

（四二オ、原文割書）

すなわち、当時の京都アクセントにおいても、現代と同じく「日」は下降調ヒイ（傍線部を高く発音する。以下同様）、「樋」は高平調ヒイ、「火」は上昇調ヒイであったと考えられるから、「日」は平声でありながら下降調、「樋」は上声でありながら高平調、「火」は去声でありながら上昇調ということになって、さきの「皇国ニテハ。昇ラズ降ラズ平^ラカナル聲ヲ平トシ。昇ル聲ヲ上トシ。降ル聲ヲ去トシテ。」とある記述と矛盾することになる。

宣長のこのような四声についての認識は、すでにそのころには脱稿していたとされる『古事記傳』一之卷（寛政元年（一七八九）刊）「古言^{フルコト}の聲の上り下り^{サガ}の事」の条にも記されている。そこでは、まず契沖の説を引いて

平上去の三聲を、一音の言にていはゞ、日は平、樋は上、火

は去なり。毛は平。鬢は上。氣は去なり。二音の言は。橋は平。端は上。箸は去なり。弦は平。釣は上。鶴は去なり。此類にて意得べしといへり。

〔古事記傳〕一之卷、五五オ〜五五ウ

と記しながら、これにつづけてそれぞれの調値を説明しているところなどは、『漢字三音考』と変わるところがない。

此説の如くにて、平は上らず下らず平なる聲、上は上る聲、去は下る聲なり。【漢國にては、下といはずして、去といへれども、下る外なし。又今、世の唐音の四声は、訛れる者にて、実にはたがへり。】

（五五ウ、【一内は原文割書

このような宣長の錯綜した記述について、大原孝道（一九五一）は「字義にとらわれて矛盾した説明をしていた」（二二頁）とし、また金田一春彦（一九七四）も、「宣長のものは、契沖の四声観を受け継ぐものでこれが伝統的のものであった」（二二〇頁）としながら、契沖の四声観を批評したついでに宣長の不備を指摘して次のように述べている。

平声は平らかな声と規定しながら、例として下降調の「日」や「山」をもつてきたのはまずかった。これは軽平声すなわち東声で、普通の平声ではなかったものを混同したものと見られる。この混同は……契沖にすでに起こっていて、平声は「声の本末上らず下らず」と言っていないながら例として、「日」や「橋」を出している。宣長はその先例にならなかったので、「降るを去と心得て」といるところなども、正しくなかった。

（二二二頁）

宣長自身のアクセントについては、もちろん伊勢のアクセントであったろうが、「四方の國々の音の異有りて、同言も等ならず。其は京畿のをもて正しとし。それに違へるを訛りとすべし。」（『古事記傳』一之卷、五六オ）と明確に記しており、馬淵和夫（一九五八）の言うように「契沖のものはおそらくは当時の阪和方言、……宣長は伊勢の方言であろう」（二六七頁）と疑う余地はあるにしても、およそは「京畿」のそれとして考えることを妨げる理由はない。とすれば京畿のアクセントは「日」は「上らず下らず平なる聲」であり、「樋」は上昇調、「火」は下降調であったということになるが、それもまた、江戸時代のアクセントを反映する文献資料に照らして、著しく整合性を欠くものである。

これについて有坂秀世（一九二七〜一九六四）は、宣長の記述するところを「東京あくせんと二一致スル」と述べるが、宣長がここに京畿以外のアクセントを持ちだす理由はまったくない。

それでは、宣長は自身の記述になんかの疑問も持たなかったのであろうか。しかし、たとえば上声を「上る聲」としながら「端」「釣る」のごとき高平調の語例をあげることには、なんの躊躇するところもないように見受けられる。本稿は、右の問題に一つの解を提案するものであるが、それを述べるまえに、宣長に先行する釈文雄の四声認識について検討しておきたい。

二

釈文雄（一七〇〇〜一六三）は、宣長の『漢字三音考』に先行することおよそ四十年、四声の調値について、基準を当時の中国語音

(華音、唐音)にもとめていた。すでに稲垣正幸(一九七九)によって紹介されているところではあるが、いまあらためて確認したい。文雄の所説の概要は『磨光韻鏡』(延享元年(一七四四)刊)「韻鏡索隱」によって知られる。

四聲ヲ教道^(三) スルニ本邦古來茶^(四) 椀^(五) 天^(六) 目^(七)ノ四字ヲ用フ 和ノ讀書及平話ノ字音四聲ヲ辯セズ 但連聲ノ宜ニ從フ 天ノ字ノ如キ本平聲 天目ノ字去聲ト作シテ呼フ 謂ク天^(八) 目ノ天^(九) 二類スル去聲ヲ知ラシムトナリ 雄按スルニ天目ハ可ナリ 茶椀ハ不可ナリ 謂ク椀ノ字呼フト則平聲 茶ノ字呼フト則上^(一〇) 聲 故ニ知ル 和ノ平聲ト稱スル者ハ華音ノ上^(一一) 聲ナリ 華音ノ平聲ハ和音以テ上^(一二) 聲ト爲ス 是其ノ概ナリ

(下七ウ、原漢文、声点は当該字の下に)《平》《上》《去》《入》
のように記す)

また、のちにこれを解説した『韻鏡指要録』^(三)には、その「華音」すなわち杭州音であることが述べられている。

したがって、文雄のいう四声とは、すでに処々で言われているように当時の杭州音のそれである。その観点からみれば、日本の四声は正しくないが、四声がないというわけではなく、「平安城ノ音ヲ用ヒテ四聲ヲ示ス」と、「樋ハ平聲 日ハ上聲 火ハ去聲 筆^(四)ノ筆ハ入聲ナリ 又 明ハ平聲 惡ハ上聲 飽ハ去聲 惡口^(五)ノ惡ハ入聲ナルガ如ク」であって、「千言萬話四聲ヲ出ル^(六)ナシ」という(一ウー一二オ)。そして、日本において古くから伝わる四声は、華音に比すれば平声と上声とが逆になっていることを指摘し、

「又我邦ニ四聲ヲ定ムルニ古ハヨリ茶^(七) 盃^(八) 天^(九) 目^(一〇)ノ格ヲ以テ教ヘタルハ千古ノ誤ナリ 我邦ニ平ト覺エタルハ上聲ニシテ上聲ト思ヘル盃ノ格ハ反^(一一)テ平聲ナリト知ヘシ 去ハ天目ノ天ノ格ナリ 目ハ入聲ニアラス 目下ナト云シ如ク促リ呼フ目ハ入聲ナリト知ルヘシ」(一二オ)と述べているのである。

文雄は丹波の人で、江戸遊学のときに太宰春台やその周辺から唐音を学んだとされるが、その期間を除いては多く京畿にあつたので、「平安城ノ音」をよく知っていたことは疑いない。^(四)

また、同じく文雄の著作である『三音正譌』(宝暦二年(一七五二)刊)には、このことについて概略以下のように記されている。中国は国土が広大であるから地方によって発音も同じではないが、中原の音をもって正音とする。この中原音を雅音とよび、「四邊」の音を俗音、または郷音とよぶ。さらに中原音には二種類があつて、一つは官話(読書の音)であり、もう一つは俗音(平常言語の音)である。またさらにこの官話にも二種類があつて、「一ハ四聲ヲ立テ唯全濁ヲ潤メテ清音ト爲ル者」であり、「一ハ入聲ヲ立テズ濁聲ヲ立テズ」に「唯平上去唯清音ナル者」であつて、後者を「中州韻」という。また官話の二種を通じて「中原雅音」という。中国の人はこれを「正音」としている。俗話(俗音)とは杭州音や浙江音のことである。しかし「中原雅音」は、唐宋の「正律ノ韻書ニ抵牾」するので正しくない。それに対して浙江音などは「予ヲ以テ之ヲ觀レバ瞭如トシテ正音ナル哉 唐宋ノ正律ノ韻書ニ符合スルヲ以テナリ」というのである。

いま当時の杭州音の声調を明らかにしたものを知らないが、現

代杭州音の四声は、陰平、陽平ともに中位の高さで比較的、平らに実現することが多く、陰上は高位から急激に下降し、陰去調は高位での微上昇、陽去調は低位からの上昇とみられる。

もし現代杭州音の声調に近いものを文雄が学んでいたとした場合、文雄は、その四声にもとづいて江戸時代中期、一七世紀前半の京都方言アクセントを「樋ハ平聲 日ハ上聲 火ハ去聲」「又明ハ平聲 悪ハ上聲 飽ハ去聲」(『韻鏡指要録』前掲)と聞いていたということになる。今日知られている江戸時代中期の京都アクセントは、先に述べたように、およそ現代のそれと同じく、樋ヒイ、日ヒイ、火ヒイ、また、明アク、悪アク、飽アクと考えられるから、文雄は平声を高平調、上声を下降調、去声を上昇調と捉えていたかと考えられる。

このことは、さらに文雄の没後、天保三年(一七三二)に、「無相文雄翁原考」として刊行された『韻學楷梯』(三浦道斎撰)においても確認することができる。同書巻之下「平上去入」の項には次のように記されている。

平上去入ノ文字ノ音ヲ、唐音ニテ唱フレバ即チ四聲ニ協フ。
平(ヒイ)上(ヒイ)去(ヒイ)入(ヒイ)此ノ如キノ聲。スナハチ、字典ノ説ニア
タレリ。國音ニテ四字アルコトヲ、ツラネトナヘテ、四聲ノ別
チヲ知ルハ、顔淵孔子。又ハ園林江河是也。即チ平上去入ト同
類ノ聲也。此四聲國字ツケバカリニテハ、辯フベキコト難シ皇
國ノ諺ノ、シヤウノ法ヲ以テ其差別ヲ示サン 平(ヒイ)上(ヒイ)去(ヒイ)入(ヒイ)カクノ如クト知ルベシ。【平上去入ハ文字即チソ
レノ聲ニテ、平ハ平聲ノ字、上ハ上聲ノ字、去ハ去聲ノ字、

入ハ入聲ノ字ナリ。】

(下二二ウ一三オ)

右のように「平上去入」の調値は、それぞれの右傍に「皇國ノ諺ノ、シヤウノ法ヲ以テ」示されている(印刷の都合で節博士を(へ)内に記載)。それによれば、平声は平らであり、上声は下がり、去声は上がる調子と考えられる。「無相文雄翁原考」とあることを信ずれば、文雄の理解していた四声と音調との関係は、ここに明示されていると言つてよいであろう。

以上の検討は、文雄が『和字大觀鈔』(宝暦四年(一七五四)刊)のなかで「平上去入」について述べているところを理解するのに大いに役立つ。そこには次のようにある。

四聲と云事。日本にても。久しき代より。習らひ傳へたれど。あやまる事あり。茶碗天目を借りて。教へたるは。日本の四聲にて。支那の眞の四聲にあらず。平を上とし。上聲を平聲に取り違へたる。千古の謬りなり。たとへは。仮名遣大概の書にいへるごとく。橋(ハシ) 端(ハシ) 箸(ハシ) を。平上去といへるなれど。もろこしの四聲には。端(ハシ) 橋(ハシ) 箸(ハシ) の次第なり。其所以は。端と云は。何のくせもなく。平らかに和らぎいづる聲なり。是を平と云。橋と云は。聲強くはげしき故に。ひずみてのぼるなり是を上聲と云。平と云ひ。上と云格。すなはち。平上に當るなり。去は和漢ともに。同じく。箸と云の類にて。いよく聲ひずみて。過ぎ去り。速さがるやうなるを。去聲といふなり。入聲は。業(ゲツ) 発(ゲツ) 目(ゲツ) 逆(ゲツ) の類なりといひ傳へられど。是眞の入聲にあらず。眞丹の入聲は。日本といふ時の日の字。一切と云一の字などのごとく。つままる

聲を。入聲と云なり。然れば日本に傳へたる。上聲を平と名
 け。日本の平を。上聲とし。入聲を改めかへて。眞の四聲と
 なるなり。眞丹の書に。平上去入の事あらば。此例を用ひて
 心得べし。
 (下一七ウ一八ウ)

ここにおいて、文雄は、「茶碗天目を借りて。教へ」る日本の
 四声は、「眞の四声にあらず」として、これを「千古の謬り」と
 断じ、平声は「何のくせもなく。平らかに和らぎいづる聲」であ
 り、上声は「聲強くはげしき故にひずみてのぼるなり」と述べる。
 ちなみに去声については「和漢ともに。同じく。……いよ／＼聲
 ひずみて。過ぎ去り。遠ざかるやうなるを去聲といふなり」とし
 ている。また「平と云ひ。上と云格。すなわち。平上に當るなり」
 とは、平声、上声それぞれの声調がどうであるかは、「平」とい
 う漢字、「上」という漢字、それぞれの声調（杭州音の声調）に相
 当するということを述べているものとみられる。

しかし、当時の京都アクセントは、橋ハシ、端ハシ、箸ハシと
 推定されるのであるから、文雄は、橋ハシのような下降調を「上
 声」とし、これに「ひずみてのぼる」と説明を加え、箸ハシのよ
 うな上昇調を「去声」としていることになる。これは、宣長が「昇
 ラズ降ラズ平ナル聲ヲ平トシ。昇ル聲ヲ上トシ。降ル聲ヲ去ト
 シテ。」と述べながら、「日ハ平声。樋ハ上声。火ハ去声」として
 いるのと同様、近世期の音調のとらえ方が、今日のわれわれのそ
 れと異なるのではないかと疑わせるものである。

いまここに文雄と宣長の四声についての記述を整理してみると
 左のようになる。文雄が「支那の眞の四聲」すなわち同時代の杭

州音（此音大氏韻書ノ規矩ニ叶フ故ニ取テ正音トスルナリ）『韻鏡指要
 録』二九オのそれに準拠するのに対して、宣長は「今ノ唐音ノ
 四聲ハ古ニ違ヒテ。亂レ訛レル者ニシテ。却テ皇國ニ古ヨリ心
 得來レルトコロ。是四聲ノ正シキ者也」（『漢字三音考』四〇ウ）と
 していて、両者の見解は対立している。

◎文雄

平声「平らかに和らぎいづる聲」

例 樋ヒイ 端ハシ（高平調）

上声「聲強くはげしき故にひずみてのぼる」

例 日ヒイ 橋ハシ（下降調）

去声「いよ／＼聲ひずみて過ぎ去り遠ざかる」

例 火ヒイ 箸ハシ（上昇調）

◎宣長

平声「昇ラズ降ラズ平ラカナル聲」

例 日ヒイ 橋ハシ（下降調）

上声「昇ル聲」

例 樋ヒイ 端ハシ（高平調）

去声「降ル聲」

例 火ヒイ 箸ハシ（上昇調）

また両者ともに平声についての説明は似ていて平らかな音調とす
 るが、それに相当する具体的な語は異なる。上声についても昇る
 音調とするところは一致しているようにみえる。しかるに宣長は
 「漢國ノ四聲」について「今ノ唐音ハ。去聲ノミタマ／＼訛ラズ。
 平上ハタガヒニ訛リテ。平聲トスル者ハ。昇ル聲ナレバ。實ハ
 上聲。上聲トスル者ハ。平ナル聲ナレバ。實ハ平聲ニシテ。皆
 其名ニ違ヒ。物ノ音ノ低昂ニ合ハズ。訛舛ナルヲ明ケシ」（『漢字

三音考、四〇ウ、四一オ」という。唐音に平声とするものは「昇ル聲」であるから実は上声であり、同じく上声とするものは「平ナル聲」であるから実は平声であるというのであるが、はたして文雄が平声とする「樋ヒイ」「端ハシ」のどこが「昇ル聲」なのであるか。また同じく上声とする「日ヒイ」「橋ハシ」のどこが「平ナル聲」なのであるか。文雄にしたところで、上声を「ひずみてのぼる」と説明しながら「日ヒイ」「橋ハシ」を例にあげているのを、どのように理解したらよいのか。

三

さて文雄、宣長の四声についての認識にあらたな解釈を与える前に、宣長が継承したとされている契沖の四声認識を確認しておきたい。すでにいくたびも引用され、検討されてきた文言ではあるが、『和字正濫鈔』（元禄八年（一六九五）刊、元文四年版本による）に記されているところをあらためて検討する。

一 上声 四聲の聲をさすことかくのごとし。例をいは、公。コウ
○ 孔上 貢。谷。か。かくのごとし。平聲は聲の本末あからずさからす一文字のごとくして長し。上聲は短かくしてすくにのほる。去聲はなまるやうに聲をまはず。入聲は下にふつくちきの音ありて切直なり。蝶。鐵。宅。七。敵。此類なり。昔梁武帝朱弁といふ臣に四聲を尋たまひし時。忽に天。子。萬。福。と答へ申けるとかや。比類なき事なり。平聲と入聲とに輕あり。當りて居るなり。天下などいふ天は平聲の輕なり。客僧などいふ客は入聲の輕なり。平聲の輕は

字の左の中ほとに聲をさし。入聲の輕は字の右の中ほとにさすなり。此國の俗にていは、天はもと平聲なるを。常に天といふ是にて叶へり。天地。天下。天子。天氣などいふ時も同じ。天。門。冬。又。文。博士などいふ時は、音便上聲なり。天。王。天。女。天。神。天。台。天。狗などいふ時は去聲なり。此ふたつは中華には叶はず。只此國の習ひなり。平上去の三聲の様皆これに准らへて知へし。和語にも平上去の三聲あり。一字假名にていは、日。火。毛。け。蹴。け。食。け。二。字假名。橋。箸。は。し。端。は。し。箸。は。し。弦。つる。釣。つる。鶴。つる。此類にて心得へし。木綿ゆふ。龍たつ。奥おく。市いち。雪ゆき。かやうなるを入聲に准らふへき歟。鴨。かも。是は平聲の輕なるに。鴨。河。これは上聲。鴨。社。是は去聲なり。つ、きによりて同じ言もかく聲のかはるなり

（卷五、四六ウ、四八オ）

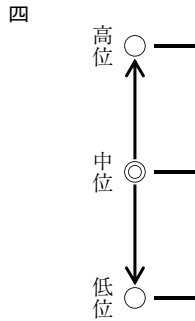
ここで契沖は、平声を「本末あからずさからす一文字のごとくして長し」とし、上声については「短かくしてすくにのほる」、去聲は「なまるやうに聲をまはず」と説明している。しかるに例として挙げたものをみると、たとえば「日」「橋」に平声点を、「樋」「端」に上声点を付けているのは、当時の京都アクセントが、日ヒイ、樋ヒイ、橋ハシ、端ハシであることに照らして説明がむつかしい。平声輕を「當りて居るなり」と説明して、さらに「天はもと平聲なるを。常に天といふ是にて叶へり」というところから考えれば、平声輕もまた平声のうちに含まれるようである

から、これ⑧で規則にかなっていると強弁しているのであろう。このところは、すでに金田一（一九七四、前掲）によって、契沖が平声と平声軽とを混同しているとして批判されているが、問題はこればかりではない。上声を「短かくしてすくにのほる」と説明しながら、その例として全平調「樋ビイ」「端ハシ」をあげている。これは果たして上昇調でなくてよいのであろうか。また「短かくして」とはなにをいうのであろうか。

金田一（一九四三＝二〇〇一、七八～七九頁）は、契沖の「短かくしてすくにのほる」というのは「何等捉はれた觀念を有たすに之に対したならば、短い上昇調、即ち一拍の中に低から高へ昇るやうな音調を意味したものと想像する」としながら「契沖の解してゐた上声の音価はこのやうなものではなかつた」という。しかし『開合名目抄』に「平ヨリ上ニ移ニハ平ヲ下テ曰ヒ上声ヲ直クニ可曰」とあり、またそこに「四。身」に「角徵」などと節博士のあることから、「直ぐに」とは「高く平らに発音されることを意味してゐる」と考え、「さすれば契沖が「直ぐに上る」と言つたのは、高く初まる平らな音調を言つたものと見て、無理ではない」（七九頁）と結論している。

さて、契沖は「樋ビイ」「端ハシ」のごとき音調（高平調）を上声とよび、「短くしてすくにのほる」と説明した。宣長はその音調を同じく上声とよび「昇ル聲」とした。ここに共通するのは「のほる」ということではあるが、そのことばの意味するところは、われわれが等しく考えるような、時間の経過とともに徐々に上昇する音調ではないということになる。

私見によれば、それは、当該の語を発音する際の発端の高さが、ある基準となる高さよりも高位であることを意味しているのである。いま相対的な高さの中位を基準とすれば、そこからまっ直ぐに高くのぼったところから発するのが上声ということになる。契沖や宣長はそうに考えていたのではないか。



契沖や宣長をはじめとする当時の国学世界においては、平声は中位にはじまる音調、上声は高位にはじまる音調、去声は低位にはじまる音調と認識されていたものと、筆者は考える。宣長が平声を「昇ラズ降ラズ平ヲナル聲」としたのは、中位にはじまり平進する音調のことを言っているのである。契沖は真言声明の伝統を受け継ぎ、「平聲は聲の本末あからすさからす一文字のことくして長し」と説明するが、これもまた中位にはじまる平進調をさして言つたものである。金田一は、これを「低平調」と解釈したが、契沖の認識としては、低とまでは言えないのではないか。宣長も同様であつたにちがいない。

契沖にとつても宣長にとつても、『中位平進』の変種として『中位下降』の音調があり、これが実際に耳にする平声の音調であり、

また「平声軽」の音調と認識されていたものと思われる。宣長に「平声軽」についての言及はないが、契沖が「平聲と入聲とに輕あり。當りて居るなり」というのは、このような下降調を想定して説明したものであろう。

金田一（一九四三・二〇〇）は、論議書の記載を援用して「當る」とはそれ自身を高平に発音し、次の拍を低く発音することを意味するやうである」（八〇頁）とし、また「据うる」とは下降的な音調を意味するものと考へられ、「當りて据うる」とは初めを高く声を出し、而して下降調に発音するので、結局契沖の平声輕の内容は下降調と見られるかと考へる」（八一頁）と述べた。ここに金田一が述べているのは、契沖の記した、四声によるアクセント標示が、過去に聞かれたと想定される音調と、どのように対応しているかについてであることに注意しなければならない。

しかし本稿は、契沖がどのように四声について認識していたかを問題にしているのである。契沖にとつては、本来の平声は《中位平進》の音調であり、平声の実際の音調や平声輕の音調は《中位下降》ととらえていたのではなかったかと想像する。

宣長も本来の平声を《中位平進》とみることに変わりはない。なかたであらう。ただ、彼にとつても平声とされる語の実際の音調は下降していたのであろうから、これを《中位下降》とみていたのではないか。したがって、平声の軽と重との共通するところは、ともに中位からはじまる音調ということである。

このように考えれば、去声に対して宣長が「降ル聲」と説明したのも理解しやすい。去声は低位にはじまる音調と理解されてい

たのである。発音するときに、基準となる高さ（中位）よりも下がったところからはじまる音調のことを指して去声といった。契沖が「去聲はなまるやうに聲をまはず」と述べているのは、とくに一拍名詞に聞かれる「火ヒイ」のような低位にはじまる上昇調を表現したものである。

このようなことは、江戸時代における共通認識であった。だからわざわざ細かく説明しなかったのであろう。契沖や宣長の記した四声についての説明を、我々がよく理解できなかったことの背景には、右のような事情があったものと思われる。

それでは漢学世界にあった文雄の場合はどうであらうか。筆者は、文雄もまた同様に語のはじまりの高さを考えていたものと推定する。先にも述べたように、文雄は平声について「何のくせもなく。平らかに和らぎいづる聲なり」という。当時の杭州音の平声がそのような音調であったことにもとづく。そしてそれを《中位平進》と認識したのである。また上声については「聲強くはげしき故に。ひずみてのぼるなり」という。文雄にとつて杭州音の上声とされるものの音調は、高位から急激に下降するように聞こえていた。それを京都アクセントと対応させたときに「日ヒイ」「橋ハシ」が、それに近く聞こえたということである。彼は、京都アクセントの、このように下降する音調を、杭州音の上声のそれに準えて聞いたのである。「ひずみてのぼる」とは、基準の高さである中位から逸脱して、高位にまでのははじまることを表現したものと解釈できるので、京都アクセントの「日ヒイ」「橋ハシ」に相当すると考えたのであろう。文雄はまた、去声につい

て「いよ／＼聲ひずみて。過ぎ去り。遠ざかるやうなるを去聲といふなり」と説明している。これもまた杭州音について観察した印象を述べたものであろうが、基準を逸脱して低くはじまり、上昇する音調ということでは、京都アクセントの「火ヒイ」「箸ハシ」に相当するとみてよいであろう。

文雄は、しかし、彼のいう平声について「のぼる」とは説明していない。ただ「平らかに和らぎいづる聲」と述べるばかりである。このことは、文雄のいう平声の音調（たとえば「樋ヒイ」「端ハシ」）を、平進とはみていたが、高位から発しているとは捉えていない、すなわち高平調とは捉えていないことを意味する。彼もまた平声の本質を《中位平進》と考えていたのであろう。

文雄は「樋ヒイ」「端ハシ」のごとき音調を中位から発するものと捉えた。一方、宣長はそれらの音調を高位から発するものとして捉えた。もちろん、文雄は当時の杭州音の枠組みに基づいてそう考えたのであるし、宣長は日本伝来の四声認識をもとにそう考えたのである。中位にはじまる音調であっても平進調や下降調は実現できるのであり、はじめりが高位であるか中位であるかについてのみ、契沖や宣長と、文雄との間で認識に違いがあったものと考えられる。

以上によって、われわれが下降するととらえる音調に、近世の学者が「のぼる」と説明し、同じく上昇するととらえる音調に「くだる」と説明することの理由が理解できた。もともと、去声について、はつきり「くだる」と述べているのは宣長だけであるけれども。

五

ただここに確認しておくべきことは、これら近世を代表する三人の学者は、はたして平上去の音調を正確に観察できていたのかということである。金田一（一九七四、二二頁）は、契沖や宣長の認識を疑い、さらに「記述・書写の正確度の計り方」（同、二六〇頁以下）の項を設けて、有坂秀世からの書簡を引く。そこには、次のようにあったという。

兎に角、言語上の習慣といふものは恐ろしいもので、……明瞭に降るものをあたかも昇るかのやうに感ぜしめて居ります。……かやうな事実から推して考へると、音の昇降に関する古人の意識などはかなり疑はしいもので、例へば、昔の人が、「上声者厲而拳」と書いてあるとしても、この記述だけから直ちに、「当時その方言で、上声は昇る調子であった」と断言してよいものかどうか、躊躇されます。宣長などの昇降意識についても、やはり同様な事情が考へられは致しますまいか。

（同、二六五―二六六頁）

金田一は、この書簡から「貴重な示唆がえられる。一言にして言えば、《人は先人観にとらわれる。》ということである」と述べ、さらに「今まで各地の方言その他のアクセントを観察しながら気付いた傾向」の第四項に次のように記した。

「上声」とか「平声」とかいうことばに引かれやすい。つまり「上声」と呼ばれるものは昇るように感じ、「平声」と呼ばれるものは平らなように感じる。……契沖が、「日」とか

「橋」のような語を引いて、平声は上らず下らず平らだと言っているのもその例と見られる。…… (同、二六七頁)

これによれば、契沖も文雄も宣長もみな、平声は平らで、上声は昇り、去声は降る音調だという先入観にとらわれていたために、同じように観察を誤ったということになる。しかし、はたしてそう断じてよいものか。宣長自身もこのことには注意を払っていた形跡があり、『漢字三音考』に次のようなくだりがある。

モトヨリ四聲ノ差別ハ。甚分明ナル物ニハ非レバ。平聲ゾト思ヘバ。平ラカナル如クニ聞エ。上聲ゾト思ヘバ。上ル如クニ聞ナサレテ。其違ヘルニ心モツカザルナルベシ。サレド物ノ音ノ低昂ニ合セテ呼ビ驗ムレバ。其違ヒ分明ナル者ナリ。

(四一〇―四一ウ)

たしかに契沖の場合は、平声が実際には下降調に聞かれることについて、「平声輕」を導入することによって胡麻化したようなところがないでもない。宣長は「平声輕」には言及しないが、しかし契沖以来の四声認識を継承していることに揺らぎなどないようである。まして、当時の唐音を観察して四声を論じた文雄に、そのような先入観があったとは考えにくい。

また、漢学世界にあった文雄が、契沖や宣長と同様な観察のしかたをしていたことを、どう考えればよいか。ただ彼は、文字通り平らな音調を平声と認定したが、それは宣長が高くはじまる音調(上声)と認識した語であったという違いがあっただけである。

岡島昭浩(一九八六)によれば、京都の人で、漢学者であった中村惕齋(二六二九―一七〇二)の『韻學私言』には、和語の「柿」

カキ、「垣」カキ、「蠣」カキイ、「端」ハシ、「橋」ハシ、「筋」(箸か)ハシを例示して、それぞれを平声、上声、去声に充てているところがあるという。これは文雄の述べる四声認識と重なるものであって、惕齋も文雄も漢学者として当時の唐音を観察して四声をとらえ、それにもとづいて日本語のアクセントを記すことでは一貫しており、音調の認識になんらかの誤った先入観がはたらいたとは考えられない。

六

以上で当初もくろんだ本稿の目的は達したわけであるが、最後にこのような四声認識がどのようにしてあらわれたのか、またそれが継承されることがなかったのかについて、とりあえずの私見を述べておこうと思う。

はたして契沖や宣長のごとき四声認識は、どのようにはじまったものであろうか。またこのような音調の捉え方は、宣長ののちしばらくは継承されたのであろうか。いま、このことについて明確な見解を提示することはできないが、思いつくところをいくつか記して稿を閉じることにする。

まず、語のはじまりの高さを問題にして、基準となる中位から「上がる(昇る)」または「下がる(降る)」と捉える見方は、安然の『悉曇藏』にある「表則平聲直低有輕有重 上聲直昂有輕無重」(巻五、二九オ)の解釈にさかのぼるのではなからうか。「直低」「直昂」は、とくに契沖の「直ぐにのぼる」につながるものであろう。ただし、いまは契沖のごとき近世の学者が、これを読

んでどう理解したかということを問題にしているものであって、当時の実音調がどうであったかを論ずるものではない。

つづいて明覚の『悉曇要訣』に「初昂後低爲平聲之輕」(巻一、一五ウ、京都大学文学部国語学国文学研究室編『安永三年板複製 悉曇要訣』京都大学国文学会一九六三による) などとある。「初昂」「後低」についても、金田一(一九五二=二〇〇二)は、

茲で、「昂る」とか「低る、」とか言ふ語は、如何なる音価を表したものであるか。現在の術語では「アがる」と言へば低から高への変化を意味し、「タれる」と言へば高から低への変化を意味するが、然し、この記述に於いてもそのやうだと解しては、四声の孰れもが、低から高へ、或いは高から低へ、変化する音価のものばかりで、高にせよ低にせよ平らなもの一つもない。と言ふことになる。之は可笑しい。……それ故、此処の「昂る」は「低から高へ変化する」の意味ではなくて「高い」の意味、「低る、」は「高から低へ変化する」の意味ではなくて「低い」の意味だと考へることにする。単に高く平らな音勢を「昂る」と表現し、低く平らな音勢を「降る」と表現することは、今の人も有り勝ちなことであるから、昔の人なら猶更である。それから又、「アがる」「タる、」といふ訓みは、版本の送り仮名に従つたものであるが、明覚自身は、「昂」を「タカし」、「低」を「ヒクし」と訓む意向であつたかも知れないのである。(二二四～二三頁)

低位に降つてそこから)発音すると捉えられていたのではなかったかと想像する。少なくとも近世の学者には、そう解するほうが自然であつたらしい。

さらに『中位平進』などという「中位」についても、たとえば声明界に知られる覚意の五音博士のごときは、文字の左傍中央に角譜(多く平声に対応する)が付けられ、左上に徴譜(多く上声に対応する)が、またさらに左下に商譜が配置されて、音の高さの中位、高位、低位を認識しやすくしていることもあるし、『韻學楷梯』に引かれた「謡ノシヤウノ法」も節博士が文字の右辺に三種あるが、平らな博士を中位の高さを指示するものとみることに、特段の支障はなかつたものと思われる。

ところで、後世このような四声認識は廃れてしまったように言われているが(金田一九七四、二二頁)、それは「のぼる」とあれば上昇調、「くだる」とあれば下降調と捉えられるようになったことも関わつていよう。中位の高さを基準として、「のぼる」がより高位にはじまる音調をあらわし、「くだる」がより低位にはじまる音調をあらわすということが忘れられたことから、契沖や宣長の四声認識が継承されず、「上声」は「のぼる」のだから上昇調、「去声」は「くだる」のだから下降調と理解されるようになったのである。

宣長没後の門人とされる伴信友の『仮名本末』(下巻三二オ、勉誠社文庫63一九七九による)に載せられた「四声点図」は、文字一字に見立てた四角形左辺の上中下の位置に「上、平、去」をこの順に並べた珍しいものである。『類聚名義抄』の「上平去の位を

定て。訓を注せる片假字の字ごとに。左旁に朱點を施したり。今其點圖を作りてここにあぐ(三〇ウ)というが、このとき信友の脳裏に契沖、宣長の四声認識があつたとみれば、かかる点圖を描いたとしてもなんら不思議はない。

以上、近世の四声認識について、宣長をめぐつて契沖、文雄と比較検討しながら、その述べるところを明らかにした。なお、これまで四声観、アクセント観というときに問題とされるのは、それが文字を単位とするものか、語を単位とするものかについてばかりであつたが、そのことに配慮して、ここではあえて四声観といわずに、「四声についての認識」、縮めて「四声認識」と呼んだことを記しておく。

注(1) 大野晋(一九六八)による。

(2) ……宣長ノ発音ニ於ケル「橋」「端」〔著〕ノあくせんとハ、大体現時ノ東京・山口ニオケルモノト同様デアツタト考ヘラレル。之ヲツノ他ノ例ニ及ボシテ考ヘルニ、「弦」〔平〕「釣る」〔上〕「鶴」〔去〕ハ……コレ亦現今ノ東京あくせんとニ一致スル。(有坂一九六四、二八頁)

(3) 林史典(一九八二)には、『指要録』の「稿成つたのは最晩年、おそらく宝暦十年(一七六〇)から歿年(宝暦十三年(一七六三))に至る四年ほどのあいだであつたと思われる」とある。安永二年(一七七三)刊、勉誠社文庫91による。

(4) 新村出(一九〇六)などを参照。

(5) 遠藤光暁(一九八九)による。
早稲田大学大学院文学研究科博士後期課程に在籍する王曹傑氏によれば、中国にも現代杭州音の声調について優れた研究の蓄積があ

る由であるが、それらに報告された結果からみても、およそは右のような解釈をして誤らないものと思われる。

(6) 文雄の見た「仮名遣大概」がどのようなものであつたか正確には分らないが、たとえば左のようなものが参考となる。

『五十音假名遣大概』(早稲田大学中央図書館千厩文庫 写一冊)

漢土にては平上去入と四つにわかれと皇國にては平上去にて

のほらすくたらざるを平

のほるを上 くたるを去

右のとほりにて人といふはなし たとへは

おほうし平 おほやま上 おほ野去

かくのことなからみつともにおのか名なりと 谷川うしのはれしとも有ぬへし

橋(橋ハシ)平 端上 箸去

晝(晝ヒル)平 簀上 蛭去

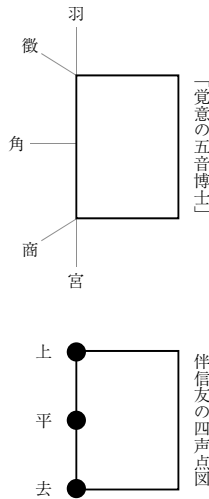
蚊(蚊カヤ)平 樵上 茅去 余は准してしるへし

(7) 文雄が、四声それぞれの調値は「平」「上」それぞれの漢字の声調と同じだというのに対して、宣長は、「其聲各其名ノ如クシテ」と述べて、「平」「上」それぞれの漢字の字義によると考えていることは、ここにあらためて確認しておきたい。

(8) 前田富祺(一九六二)に「平声の中に平声軽という下位区分があると考えたから平声の軽をも平声で代表したのである」(五一頁)とある。

(9) ただし「直ぐに」だけで、それがただちに「高く平らに発音されることを意味している」とするところは、「高く」とまでは言えないのではないか。私見によれば、ここでの「直ぐに」はただ「まっすぐに」「平直に」の意味を理解すべきもので、「平ヨリ上ニ移ニハ平ヲ下テ曰ヒ上声ヲ直クニ可曰」とは「……平を下げて上声を平らに」ということであろう。「開合名目抄」には同じところに、たとえば「平ヨリ入声(二)移ニハ平モ入モ俱直クニ可曰」とあるが、これも「平らに」と言っているものである。

(10) 新井弘順(一九九六、一九九八)の「図30」を参照(左上に掲載)。「音律肝要」南北朝頃写 上野学園日本音楽資料室蔵」と説明が付されている。



(11) 伴信友の四声点図(右下に掲載)は、早く金田一(一九四二=二〇〇一、一〇八頁)において、その難点が指摘されている。しかしこれが契沖、宣長の所説を継承したものであることについて、いまだ言われたためしがないようである。なお、新村出(一九九七=一九七一、五二〇頁)は、この四声点図を掲げて「其音点に随ひて其言を唱へ試むるに、今の京言の如し」と述べている。

参考文献

新井弘順(一九九六)「声明の記譜法の変遷—博士図を中心に—」『日本音楽史研究』一
 有坂秀世(一九二七)「分析的観察」(旧制一高時代の著作)『語勢沿革研究』三省堂一九六四
 稲垣正幸(一九七九)「釈文雄「和字大観鈔」のアクセント語彙」『都留文科大学研究紀要』一五
 遠藤光暁(一九八九)「杭州方言の音韻体系」『均社論叢』一六、『漢語方言論稿』好文出版二〇〇一
 大野 晋(一九六八)「解題」『本居宣長全集』第九卷(古事記傳一)筑摩書房

大原孝道(一九五二)「古事記に註記された上去のアクセントについての私見(上)」『音声学会会報』七七

岡島昭浩(一九八六)「元禄期における字音M尾N尾の発見—中村惕齋の「韻学私言」—」『文献探究』一八

金田一春彦(一九四二)「類聚名義抄の和訓に施されたる声符に就て」『国語学論集』岩波書店、『日本語音韻音調史の研究』吉川弘文館二〇〇一

金田一春彦(一九四三)「契沖の仮名遣書所載の国語アクセントについて」『国語と国文学』二〇一四、『日本語音韻音調史の研究』吉川弘文館二〇〇一

金田一春彦(一九五二)「日本四声古義」『国語アクセント論叢』法政大学出版局、『日本語音韻音調史の研究』吉川弘文館二〇〇一

金田一春彦(一九七四)『国語アクセントの史的研究 原理と方法』塙書房(第一版三刷(一九九二)による)

新村 出(一九九七)『日本音韻研究史』(東京帝大文科大學博言学科第一学年試験論文)『新村出全集』第一卷 筑摩書房 一九七一

新村 出(一九〇六)『音韻学者文雄』『新村出全集』第九卷 筑摩書房 一九七二

林 史典(一九八二)「解説」『韻鏡指要録 翻切伐柯篇』勉誠社文庫91 勉誠社

前田富祺(一九六二)「契沖のアクセント観」『芸芸研究』四〇
 馬淵和夫(一九五八)「国語の音韻の変遷」『国語教育のための国語講座』第二卷 朝倉書店

本稿は、日本学術振興会科学研究費補助金(基盤研究(C)18K00625)および早稲田大学特定課題研究助成費(基礎助成2018K-062)による研究成果の一部である。なお本稿で引用した本文は、とくに記さないかぎり、主として早稲田大学中央図書館蔵の版本によったことを申し添える。